

「仮面の告白」私見

—三種類の「前提」の意図するところをめぐって—

前田貞昭

I

「仮面の告白」は、一九四九年七月、河出書房から、書き下ろし長編小説シリーズ企画の一冊として刊行された。この作品は、前年秋に大蔵省を辞任した三島が、初めて職業的作家たる決意の下に執筆した自伝的作品である。その執筆動機について三島自身も何度か触れているが、今少しその辺の事情について書き留めておきたい。

『文芸文化』という足掛りをなくした三島も、敗戦後まもなく活動を始めている。例えば、「仮面の告白」刊行前に、三冊の作品集を上梓し、また、各誌に分散発表していたものに書き足して、長編「盗賊」を一本にまとめている。一方、時評等に新人作家三島が取り上げられることもしばしばあり、『人間』一九四八年三月号誌上では、椎名麟三・中村真一郎・梅崎春生・野間宏らとともに「新しい文学主張」を担う作家の一人として、エッセイ「重症者の兇器」を三島は発表している。しかし、美辞麗句を並べ立てる、才気だけの作家と見なして、その才能によって表現すべき内実の存在は疑問視する人々も多くいた。例えば、「夜の支度」(『人間』・一九四七年八月)を組上に載せた『群像』「創作合評」の席上では、豊島与志雄・高見順・中島健蔵三氏がともに否定的な評価を下している。三氏の意見は、次のような高見順の言葉に集約されるものであった。

彼が書いている小説は、彼自身の生きること何の関係もない、そういうところから生ずるうまさに対して疑問がある。

いかにも高見順らしい見方であるが、右の三氏に限らず、このような見解は多くあったのであり、ことに、それは『近代文学』グループの間で強かった。そのところを、本多秋五氏は、「『仮面の告白』を発表するにおよんで、(三島は)はじめて否定できぬ特異な才能として文壇の評価をえたのであった」と回顧している。『近代文学』グループを批評家群として持ちつつ、新しい成果を生み始めていた敗戦後の文学状況に三島を置いたとき、彼は、同時代を生きるための、いわば出生証明書を持たない作家としか見られていなかった、と言うことができる

のである。

三島は、そのころの文壇での孤独感を、『序曲』(一九四八年二月刊の創刊号のみ)廃刊の思い出に託して、次のように述べている。

私が、へんてこりんな時代おくれの唯美派と目されてゐたころから、何年かたつて、やつと戦後派陣営の一員に迎へられるや否や、その拠点(『序曲』を指す)が空中分解してしまつたわけだ。

「煙草」(『人間』一九四六年六月)を推薦し、『盗賊』(真光社・一九四八年一月)の序を書いた川端康成のような理解者を持つてはいても、当時の三島が抱かざるをえなかった孤独感の一端が、この文章からも理解できる。このような己れの孤独感の由来を十分認識していた三島が、自分の出生を明らかにしようと考へたことは、容易に推測される。

「仮面の告白」刊行時に付された「『仮面の告白』ノート」によって、その自伝性を明らかにした三島は、この作品で己れの出生を語った。自伝的な「告白」という「彼自身の生きること」深く関わった基本姿勢を前面に据えたことにより、また、その「告白」内容の基調が衝撃的で他に類のない独自の同性愛記述であったことにより、三島の三島たる所以は明らかにされ、彼は新鮮な同時代作家たる地位を獲得したのである。後年、奥野健男氏が、「三島由紀夫論——にせナルシズムの文学——」(『文学界』・一九五四年三月)で、三島に多大な期待を寄せているのも、新人作家三島の持つ新しさを見出したからにはかならない。新人作家に期待されるのは、新たな地平を、その作家固有の方法と内容によって切り拓くことにあるのはもちろんである。それを奥野氏は、「あざやかな截断および正確な論理」と「あらゆる既成概念に対する、三島の痛烈な批判と悪意」に見出しているのである。このことは、例えば、同じように同性愛を扱い、同時期に発表された川端康成の「少年」(『人間』・一九四八年五月)一九四九年三月)中の穏当な内容とゆるやかな形式を、「仮面の告白」中のそれらと比べてみれば分かるだろう。と同時に、刊行時に付された「『仮面の告白』ノート」によつ

て、この作品が三島の存在と深く関わって生まれたことを明らかにしたのも、従来の評価を覆す大きな要因となったであろう。

右のようなことは、執筆前から三島自身が期待していたことであり、そのためきわめて大きな意気込みで、彼は「仮面の告白」に取りかかっていた。三島の意図と意気込みは、例えば次の書簡の一節にもうかがえる。

今度の小説（「仮面の告白」を指す）、生れてはじめての私小説で、もちろん文壇の私小説ではなく、今まで仮想の人物に対して鋭い心理分析の刃を、自分に向けて、自分で自分の生体解剖をしようといふ試みで、出来る限り科学的正確さを期し、ポオドレルのいはゆる『死刑囚にして死刑執行人』たらんとするものです。相当の決心を要しますが、鼻をつまんで書きます。(佐三)

（傍点、引用者）

右の引用は、当時、河出書房の書き下ろし長編小説シリーズの一冊として「仮面の告白」執筆を依頼され、それ以後頻りに往来していた坂本一亀氏に宛てた私信の一節である。従来よく引かれている「『仮面の告白』ノート」の銜いと頼暉の入り混じった文章に比べ、この書簡では、「自分で自分の生体解剖」をしようという「『死刑囚にして死刑執行人』たらんとする」決心のほどが、より素直にうかがえる。この一九四八年一月二日付の私信には、正直な三島の執筆姿勢があると言つてよいのではなからうか。

この坂本氏宛書簡で注意を惹くのは、「生体解剖」や「科学的正確さ」という言葉である。ここで考慮しなければならないのは、「仮面の告白」が同性愛という題材を取り扱い、作中では、ヒルシュフェルト等の説を引用するなど科学的分析的な態度がとられていることである。つまり、その題材・記述態度からして、ここで言う「科学的正確さ」とは、同性愛に関する心理学的、精神分析的な正確さを指していると判断されるのである。

「仮面の告白」は、心理学や精神分析学の観点から何度か論じられており、そこで論者たちは「仮面の告白」中の同性愛記述を好個の研究資料と断じている。しかしながら、それら専門家に見ても、その解釈は多様であり、またその過程にも疑問の余地がないわけではない。そこで私は、「科学」によってこの「仮面の告白」を三島がいかに成立させようとしたかを追究するところに、本稿の目標を置くことにしたい。

II

さて、「科学的正確さ」という前記坂本氏宛書簡の言葉から、私は、ヒルシュフェルトの名を出しておいたが、彼の名は「仮面の告白」中次の三個所に記されている。

- (A) ヒルシュフェルトが倒錯者の好む絵画彫刻類の第一位に、「聖セバスチヤン」の絵画を挙げてゐるのは、私の場合、興味深い偶然である。（第二章）
- (B) ヒルシュフェルトは倒錯者を分類して、成年の同性にのみ魅惑を感じる一類を *androphilis* とよび、少年や少年と青年の中間の年齢を愛する一類を *ephebophilis* とよんだ。私は *ephebophilis* を理解しつつあつた。（第三章）

(C) 倒錯現象を全く単なる生物学的現象として説明するヒルシュフェルトの学説は私の蒙をひらいた。あの決定的な一夜も当然の帰結であり、何ら恥づべき帰結ではなかつたのである。想像裡での *Ephedra* への嗜欲は、かつて一度も *pedicatio* へは向はずに、研究家がほぼ同程度の普遍性を証明してゐる或る種の形式に固定した。（第四章）

このヒルシュフェルトとは、マグヌス・ヒルシュフェルト (Magnus Hirschfeld, 1868~1935) のことである。性科学者でベルリン性科学研究所を主宰したヒルシュフェルトは、『性的中間者年報』を編集し、主要な著書としては、『男性及び女性の同性愛』(1914) 等を公刊している。彼の調査報告等は、同時代にフロイトも引用しているが、今日でも、二十世紀初頭の性に関する貴重な資料を提供するものとして、その価値は認められているようである。

私の調査した限りでは、彼の編著である『戦争と性』全四巻（高橋洋吉訳、同光社機部書房・一九五三年八月一日〜一九五五年二月一日）のみが邦訳されており、これ以外の著作の邦訳は見当らない。(佐三) この『戦争と性』の邦訳刊行は「仮面の告白」刊行以後であり、かつ、同書がその序文にあるように「世界戦争と性愛との関連に於いて従来あつた文献や絵画の資料を纏めて、その概観を与えようとする」ものであるので、「仮面の告白」中の記述と関連するところはな

い。

『定本三島由紀夫書誌』（島崎博・三島瑠子共編、薔薇十字社・一九七二年一月二五日）中「蔵書目録」には、ヒルシュフェルトの著としてこの『戦争と性』だけが記載されている。そこから、「仮面の告白」中のヒルシュフェルト説の引

用は、原書からの直接のものである、との推測も確かに成立する。しかし、ヒルシュフェルトの見解を知るには原書しかなかった、と考えるのも速断にすぎよう。

前記「蔵書目録」には、エリス (Henry Havelock Ellis, 1859-1939) の著『性の心理』(原題『性の心理学的研究』The Studies in the psychology of Sex, 1879-1910) が挙げられている。この『性の心理』全二〇巻は、全六巻の原著を増田一朗氏が翻訳して、日月社から刊行(一九二七年一〇月二十五日)一九二九年六月一三日)したものである。なお、「蔵書目録」には、全二〇巻の内、第四巻・第一〇巻・第一一巻を欠いている。

この『性の心理』第四巻『性的倒錯 序論・研究』に收められた研究家小列伝とでも言うべき『性的倒錯の研究』中で、エリスは、ヒルシュフェルトを次のように高く評価している。

軌近 性的倒錯の知識を広汎な且つ確定的な基礎に置くことに貢献した点に於いて、伯林の人・マダヌス・ヒルシュフェルト博士に及ぶものはあるまい。彼は同性愛現象のあらゆる状態を知悉することに於いて無比な実験的経験を積んでゐる。(略) ヒルシュフェルトのこの著述(『男性及び女性の同性愛』)は実に、倒錯問題に関する限りの最大な、のみならず最も精核な、詳細な、包括的な、而かも最も精髓的に圧搾された著述である。(略) ヒルシュフェルトの此の著述には、性的倒錯に関する病理学的概念は全然影を没し、同性性欲は先づ第一に普遍的な存在の生物学的現象であり、第二に極めて重要な社会現象であると認められてゐる。其処には何等新学説を発見せんとする企図は窺はれないが、確定的事実にも断続的努力をもつて触れて行くところに彼の著作の主要価値が蔽存してゐるのである。この問題に関する明晰にして確実なる知識を獲んことを欲する総ての人々に必須欠くべからざる資源となる所以は、実にこの著述に如上の特質があるからである。

このように称賛したヒルシュフェルトをエリスが、「独創的なものではないが、古今東西にわたる該博な知識を流麗な文章で披歴した性の百科事典(註)と評される『性の心理』で、度々引用し、その見解に重きを置いたのは当然であろう。その「蔵書目録」にある『性の心理』を、三島が、ヒルシュフェルトの学説の拠り所にしたことも十分推測されるのである。

『性の心理』全二〇巻中、男性の同性愛に関係する巻は次の通りである。

第四巻『性的倒錯 序論・研究』

第五巻『男性に於ける性的倒錯』

第七巻『性的倒錯 性質・理論・結論』

先に、「仮面の告白」中でヒルシュフェルトが引用されている部分を掲げたが、興味深いことに、それらは、また、エリスが第七巻『性的倒錯 性質・理論・結論』でヒルシュフェルトの著から引用しているところと重なるのである。聖セバスチアンの絵画への嗜好を述べている(A)の箇所は、エリスの次のようなヒルシュフェルト引用と対応している。

ヒルシュフェルトは『同性性欲行為』六六頁に、同性愛者の特に好む絵画彫刻の代表的なものを列挙してゐる。聖セバスチアンの芸術、ガインスポロオの「若い少年」、ヴァンダイクの描いた若い男性、プラキンテレスの描いた英雄ヘルメス、ミケランジェロの「奴隸」、ロダンおよびムニエの彫刻の労働者、等がそれである。(第七巻『性的倒錯 性質・理論・結論』八三ページ)

(B)として挙げた倒錯者の分類に関しては、同巻六六ページに、やはりエリスがヒルシュフェルトの説として、脚注欄で引用している。

(C)に言う「倒錯現象を全く単なる生物学的現象として説明するヒルシュフェルトの学説」は、先にも引いた「性的倒錯の研究」中のヒルシュフェルト説の紹介にも出てゐる。エリス自身は性倒錯者のすべては先天的なものと考えてゐるのであるが、性的倒錯を「植物の世界、動物の世界を遍通する全生物のうち我々が発見する所の大なる有機的趣異に含まれた一変化と見做さなければならぬ」として、脚注で次のようなヒルシュフェルトの説を引用している。

ヒルシュフェルトも『同性性欲』第二十章に、倒錯の最も根柢的な動因を探らんとするには内分泌を研究する他に途はないと信じた。(同巻一四〇ページ)

内分泌すなわちホルモンの作用によって、性的倒錯が生じると言うのは、「仮面の告白」中の「倒錯現象を全く単なる生物学的現象として説明するヒルシュフェルトの学説」に照応する。

以上述べてきたように、ヒルシュフェルトの説として「仮面の告白」中に引用されている三個所の記述すべてが、エリスの『性の心理』に引用されたヒルシュフェルト説と一致し、さらに「蔵書目録」にもエリスの著が記載されていることから、エリスの著を典拠に、ヒルシュフェルトの見解を三島が引用している可能性は大きいのである。

第一章では、産湯の記憶から「幼年時代が私から立去つてゆかうとする訣別」

の情景まで、つまり「私」の記憶に残る幼年時代の各場面が語られている。フロイトがその精神分析理論の基盤を幼児期に求めて以来、人間の生涯において、この時期が後々まで重要な役割を持っていることはよく知られている。そのような意味で、「プロイトは中学生のころ私の座右の書であった」と言明する三島が、

「仮面の告白」第一章を幼年時代の叙述に充てたのは当然であろう。

もちろん、この第一章の幼年時代の記述は、ある記憶から別の記憶へあたかも連句を巻くように綴られたり、あるいは何の脈絡も必然性もなくなされていてもない。ある記憶は省かれ、ある記憶は強調されているような、整然と整理された印象を、第一章の記述からは与えられる。描き留められた記憶は、時間の浄化作用によって、かえって不要な部分が削ぎ落とされたかのように、鮮明な像を浮かび上がらせている。そして、そのように鮮明な記憶が、整理され秩序立てられているところに、「仮面の告白」第一章の特徴があると思われる。

そこで、当然その整理や秩序の基準が考えられなければならないだろう。いかなる秩序——ここでは、第一章の構造と言ひ換えてもよい——によって組み立てられているのか、という三島の意図を推測しようとするとき、描写それ自体の内実はもとより、そこに付された説明的部分を検討することによって、より明瞭に推測しうるであろう。

例えば、第一章の途中に次のような言葉がある。

かうして私は二種類の前提を語り終へた。それは復習を要する。第一の前提は糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂ひとである。第二の前提は、松旭齋天勝とクレオパトラだ。／なほ語られねばならない前提が一つある。

ここには、冗々しくはあるが、分析的な説明を付加することによって、読者に向かつて第一章における叙述の意味を明確にしておこうとする三島の意図が現われている。この一節の後には、「なほ語られねばならない前提」とされている、「殺される若者たち」の幻影と「自分が戦死したり殺されたりしてゐる状態を空想することに喜びを持った」こと——サディズムとマゾヒズムの好み——が記され、続いて幼年時代の終局を告げる祭りの場面が描かれている。幼年時代を描くことに終始した第一章の叙述のほとんどは、これら引用文にある三種類の「前提」の内容を述べることに費されているのである。してみれば、この引用部分は、第一章においては、三種類の「前提」を語ろうとした三島の意図を明瞭にしていると言つてよいだろう。

さて、ここに言う「前提」は、「糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂ひ」、「松旭齋天勝とクレオパトラ」、そして「殺される若者たち」と自分の殺されるイメージの三種類であるが、これらは、何の「前提」になるのであろうか。

第一章中には次のような部分がある。

……私が人生ではじめて出逢つたのは、これら異形の幻影だつた。それは実に巧まれた完全さを以て最初から私の前に立つたのだ。何一つ欠けてゐるものなしに、何一つ、後年の私が自分の意識や行動の源泉をそこに訪ねて、欠けてゐるものなしに。／私が幼年時から人生に対して抱いてゐた観念は、アウグスティヌス風な予定説の線を外れることがたえてなかつた。いくたびとなく無益な迷ひが私を苦しめ、今もなほ苦しめつづけてゐるもの、この迷ひをも一種の墮罪の誘惑と考へれば、私の決定論にゆるぎはなかつた。私の生涯の不安の総計のいはば献立表を、私はまだそれが読めないうちから与へられてゐた。私はただナプキンをかけて食卓に向つてゐればよかつた。

自己の避け難い宿命の嘆きを綴つたこの一節は、「第一の前提」の一つである「兵士たちの汗の匂ひ」の魅惑を語つた直後に、一行空けて置かれている。そのため、引用第一文中の「これら異形の幻影」とは、「第一の前提」すなわち「糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂ひ」とを指している、一応解される。しかし、同じ「前提」という言葉で総括されているので、これを、他の二種類の記憶の系列にも敷衍して差し支えないだろう。というのも、右の引用中には、「後年の私が自分の意識や行動の源泉をそこに訪ねて、欠けてゐるものなしに」、「実に巧まれた完全さを以て最初から私の前に立つたのだ」とあり、「私の生涯の不安の総計のいはば献立表」とも記されているからである。もし、「私の異形の幻影」が「第一の前提」にのみ留まるとすれば、この文章や「前提」という言葉自体は全く意味をなさなくなってしまうのである。とすれば、「前提」とは、「私」の「意識や行動」の「前提」であり、「それが読めないうちから与へられてゐた」、「生涯の不安の総計のいはば献立表」なのである。そして、「仮面の告白」が性的倒錯の極から逃れようとする「私」の「告白」であつてみれば、この「前提」とは、性的倒錯の「前提」でなければならない。

三島の意図は、第一章を性的倒錯者「私」の「告白」の「前提」として配置するところにあつた、と言つてよいだろう。第二章以降に展開される諸事象を説明しうる原点として第一章を位置づけ、第一章に「私」がたどる人生のすべての萌

芽を用意しようとした。この第一章で、「仮面の告白」全体の原質を呈示しよう
と、三島は計ったのである。

三島自身は、第一章では三種類の「前提」を何の解釈も施さずに呈示したのみ
で、「後年の私が自分の意識や行動の源泉をそこに訪ね」たとき、どのように解
釈できるのかというところには、一切触れていない。しかし、「フロイトは中学
生のころ私の座右の書であった」と言い、後年「音楽」（『婦人公論』・一九
六四年一月―二月）を書いた三島は、当然、この第一章をフロイト流に解釈で
きると考えていたはずであり、管見では、その手掛りが第一章の記述にも十分に
あると考えられるのである。

このフロイト流の解釈を施すことは、ヒルシュフェルトやエリスのとする、性的
倒錯を先天的な原因によるとする態度とは必ずしも矛盾しない。

三島が先天説をとっていたことは、例えば、前節において引用した、

ヒルシュフェルトが倒錯者の特に好む絵画彫刻類の第一位に、「聖セバス
チャンの絵画」を挙げてゐるのは、私の場合、興味深い偶然である。このこ
とは、倒錯者、殊に先天的な倒錯者にあつては、倒錯的衝動とサディステイ
ックな衝動とが、分ちがたく錯綜してゐる場合が圧倒的であることを、推測
させるのに好都合である。

という部分で、己れを「先天的な倒錯者」とよんでいる一節にもうかがわれる。
もう一個所、例を挙げれば、常人と異なつた「私」の特殊な人生の認識が語ら
れている第三章冒頭近くに、次のように書かれている。

念のために申し添へねばならぬが、私がここで言はうとしてゐることは、例
の「自意識」の問題ではない。単なる性欲の問題であり、未だそれ以外のこ
とをここで言はうとしてゐるのではない。／もとより劣等生といふ存在は先
天的な素質によるものながら、私は人並の学級へ昇りたいために姑息な手段
をとつたのだつた。つまり内容もわからずに、友達の答案を試験中にこつそ
り敷写しをして、そしらぬ顔でそれを提出するといふ手段であつた。（傍点、
引用者）

この後、「バスの女車掌」への欲望を装つて、かえつて友人達を驚かせた一挿
話が語られるので、右に言う「劣等生といふ存在は先天的な素質による」との比
喩は、引用中にある「単なる性欲の問題」に関するものであることが分かる。し
たがって、この「先天的な素質による」という判断は、「私」の性的倒錯が「先

天的な素質による」ことを指しているのである。

他方、フロイト流の解釈に対して、例えばエリスは、

フロイド一派の見解に従つて倒錯を眺めるとしても、失張りどうして倒錯者
が常態人とは異つた然ういふ心的状態に這入つたのか、怎して然うした暗示
に影響されるような情緒的性質を現はしたか、と謂ふことを知る必要が出て
来るに違ひない。即ち、或る定まった遺伝的傾向が存在し、この傾向が同性
愛を現前せしめるのだ、と観ることによつてフロイド派の理論の難点は忽ち
除去されるのである。（『性の心理』第七卷「性的倒錯 性質・理論・結
論」一一九ページ）

と述べ、さらに、

大体に於いて、心理上の方面から謂へば、ある特殊の場合に限りフロイド派
の理論にそのまま適合するような型の、無意識的な力学的の心理過程が実
在することを承認し得るのである。然しながら、この種の心的機械作用の研
究は、言ふまでもなく同性性欲の心理を啓示するものではあるが、更らに一
層根柢的な有機的要素には触れるところがない。（同前）

と述べているように、幼児の心的世界のフロイト的解釈を否定しているのではな
く、なぜ同性愛が出現するのかという根本原因の追究において、フロイト派の考
え方を難じているのである。つまり、先天的な遺伝的傾向があつて、それがあ
るためにこそ、幼児期にフロイトが指摘した形で発現するのだ、と言うのである。

以上述べてきたように、ヒルシュフェルトやエリスたちのとする先天説と、フロ
イト的解釈を施すこととは、必ずしも矛盾するものではない。「仮面の告白」で、
三島は、自分の存在を根底から分析・解明しようと試みて、己れの過去を幼児期
というさかのぼりうる最後の地点まで追究した。そのとき、性的倒錯の類例をエ
リス等の調査報告に求めながら、そこに、よりダイナミックに解釈することがで
きるフロイトの精神分析学理論を応用した、と言えるのではないだろうか。

IV

フロイトの精神分析理論の鍵は、改めて言うまでもなく、エディプス・コンプレ
ックスの理論である。一口にエディプス・コンプレックスと言っても、そのあ
りようは一律ではなく、一つの理論として普遍性を持つほど、かえつて個
々の具体的な事象から離れがちなことは否み難い。したがって、その手掛りがあ
るとはいえ、「仮面の告白」中の「私」にフロイトの理論を適用する場合にも、

詳細にその生育環境と記憶を追ってゆかなければならぬだろう。

まず、その家庭環境であるが、「私」は、祖父・祖母・父母・六人の女中という都合十人の大人たちばかりの間に、長男として生まれた。とりわけ家を継ぐべき長男を大事にする旧来の習慣から見ても理解できるように、「私」は大切に育てられ、ことに祖母から偏愛された。この祖母の偏愛は異常とでも評しうるもので、生後すぐに母の手から祖母に奪われた「私」は、「しじゅう閉て切つた・病氣と老いの匂ひにむせかへる祖母の病室で、その病床に床を並べて」、一三歳になるまで育てられた。おそらくは「祖父を憎み蔑んでゐた」祖母の、孫に寄せる期待によると解されるが、祖母の偏愛よりは度を越えているのである。

この祖母と「私」との関係が、「私」のエディプス・コンプレックスの特殊な形成の要因である、と私には思われる。というのも、十人もいた大人たちの間で、祖母の存在は際立っており、祖母以外の家人の影があまりに薄いからである。生後間もない「私」を病身の祖母の手許に置くようなことを、誰も止められず、祖母のなすがままに任せている。この一事をとってみても、祖母がいれば家庭内の専制君主であったことが分かるだろう。「私」が身近に接したのは、母とこのような祖母であるが、母は、「かよわい花嫁」と書かれていないように、おとなしい嫁として振舞う、家庭内で己れを強く主張するようなことのない女性だったと想像される。父も祖父も家庭をまったく顧みなかったようであり（もし、顧みただであれば、「私」を自分の病室に置こうとするような祖母の我ままを許すはずもない）、まして祖父は、「祖父の壮年時代の罪の形見」である脳神経痛に悩む祖母に「憎み蔑まれ」、影が薄いどころか、かなり疎んじられているのである。

このような状況から、「猶介不屈な、或る狂ほしい詩的な魂」と評されている「古い家柄の出の祖母」が、実質的にこの家を取り仕切り、残る家人たちは、それに唯々諾々として従っていたことが理解されるだろう。だから、「私」にしてみれば、家とは祖母そのものとイメージされていたと言ってもよい。つまり、「私」にとつては、祖母と家のイメージは重なり合っていると考えられるのである。そこで、「私」が祖母をどのようなイメージで見ているかは、次のように描かれた家の様子からも推し測られる。

こけおどかしの鉄の門や前庭や場末の礼拝堂ほどにひろい洋間などのある・坂の上から見ると二階建であり坂の下から見ると三階建の・燻んだ暗い感じのする・何か錯雑した容子の威丈高な家だった。

と描かれた家（建物）は、家（家庭）の専制君主——「古い家柄の出」で、内実をかまわない浪費家であった祖母——の「私」に対する威圧感を象徴しているように、一般的には、家を支配する「父性」は文字通り父が担う役割であるが、「私」の家では、その役割を祖母が果たしていたのである。右に引用した家の様子から受ける威圧感と同じものを、「私」はそのような祖母から敏感に受け取っていたのである。

このような祖母が、「古い家柄の出」にふさわしく、「私」に厳しい行儀作法を教え、そして物静かな子どもに育てようとしたことは、次のような箇所から分かる。

祖母が私の病弱をいたはるために、また、私がわるい事をおぼえないやうにとの顧慮から、近所の男の子たちと遊ぶことを禁じたので、私の遊び相手は女中や看護婦を除けば、祖母が近所の女の子のうちから私のために選んでくれた三人の女の子だけだった。ちよつとした騒音、戸のはげしい開け閉め、おもちゃの喇叭、角力、あらゆる際立つた音や響きは、祖母の右膝の神経痛に障るので、私たちの遊びは女の子が普通に以上物静かなものでなければならなかった。

祖母の祖父への敵視——祖父の壮年時代の女遊びから手酷い打撃を受けた祖母は、祖父を憎んでいた——のために、祖母は、「私」が祖父のような「男」として育つのを忌避したのである。そのため、「私」は、祖母から一切の激しい「男の子」としての攻撃的な行動を許されず、「女の子」として育てられたのである。実際、その祖母の目論見は見事に成功した。それは、従妹の家で「一人の女の子であること」を要求されたときの、「私」の困惑ぶりにもうかがわれる。

このような状況に置かれた男児が同性愛に至るのは、当然とも言いうるので、例えば、D・J・ウェストが、R・R・シアーズの見解として挙げた同性愛に至る心理的要因のひとつに、「私」の場合も当てはまる。R・R・シアーズは、その要因を以下のように四つ挙げています。

第一は親の側の性的不安、特に父親のそれで、これは子供の性的な興味や好奇心を削ぐ働きをした。第二は子供の攻撃的な行動に対する母親の非難と不寛容であった。第三は懲罰と嘲笑の頻繁な使用、第四は食卓や洗面所などで守るべき作法を厳しく教えこむことであった。^(註)

第一の要因は、女遊びの結果祖父を憎むようになった祖母の心理機制を考えれば、納得できようし、第二の要因については、祖母のとつた態度にはっきりと

当てはまる。第三の要因について「仮面の告白」中に記述はないが、第四の要因に関しては、容易に想像される。このような要因によつて、「私」が父親と自己を同一視するようには成長しなかったことは確かである。性的役割の発達の観点からしても、「女の子」として遇された場合に心理的安定を与える家庭環境は、同性愛的傾向を「私」にもたらす十分な条件を備えているのである。

フロイトのエディプス・コンプレックス理論によれば、正常な男児は三―四歳になると母親に性的愛着を覚え、母親を独占的に所有したいと願う。その一方で、ともに母親を争う父親に対して嫉妬し、敵意や憎しみを感ずるが、同時に父親を愛してもいるので、自らの敵意や憎しみのゆえに罰せられるのではないかという不安を持つ。このような心理状態が六―七歳まで続き、やがて、父親への敵意を抑圧して自己を強大な父親と同一視することによつて、このような状況から逃れてゆく。以上がいわゆる陽性的エディプス・コンプレックスとその克服の仕方である。正常な男児がたどると言う。これと反対に、父親への敵意や憎しみを放棄して、母親と自己を同一視することにより、父親に愛されようとする願うのが、陰性的エディプス・コンプレックスとよばれている。

このようなエディプス・コンプレックス理論を「私」に当てはめようとする場合、祖母が父親に取って代わっていることが、状況を複雑にしている。先述したように、「私」には、同一視するべき強大な父親像が存在しない。正常な男児は父親による罰の不安（去勢不安）のため、父親への敵意を抑圧するのであるが、「私」の場合、去勢不安の根源は、あの「威丈高な容子の家」が象徴する威圧的な祖母像にある。母親への愛着を禁じ、母の手から「私」を奪い去つたのは、家庭の専制者祖母であった。

母親への愛着という点においては、「私」も正常な男児と変わりはないようである。そのことは、母に触れた言葉の端々にもうかがわれる。例えば、母の結婚については、「父はこの家で、かよわい美しい花嫁、私の母を迎へた」（傍点、引用者）と書かれ、また、天勝に扮した「私」を見る母に対して、後年心惹かれる園子を見たときに使われるのと同じ「罪に先立つ悔恨」という言葉を用いて、母への愛情を表現している。このように、園子と共通するイメージによつて、母は描かれており、そのこと自体が母に対する「私」の愛着を証拠立てていよう。

右のように、「私」の内部には、祖母に対する愛情と敵意の入り混じった両面的な感情、そして母に対する愛着が併存していると考えられる。一方、嫁・姑によくあるように、祖母と母は互いに「私」を独占しようとして、少なくともその

心中では相争っているはずである。このように見てくれば、「私」を軸にしたところの、祖母と母と「私」の愛情の三角関係が成立していると考えられるのである。祖母が、事実上家庭を支配し、「私」の内部でも威圧感を持った圧倒的な強者として存在していれば、母への愛を祖母によつて禁止された「私」は、フロイト流に言うところ、祖母を己れの内部に取り込んで、己れと祖母を同一視する方法により、このような状況から逃れようとするであろう。「私」の場合に即してもう少し正確に述べると、「私」は祖母という一種の仮面を被り、祖母という媒介物・レンズを通して、他者と関わりを持つようになるのである。

V

前節では、「私」の家庭状況から、そのエディプス・コンプレックスのありようを見たが、エディプス・コンプレックスが心理的なものである以上、「私」の内面を検討しなければなるまい。そこで、本節では、第一章を費して書かれた三種類の「前提」の実質を見てゆくことに、主眼をおきたい。

初めの記憶は糞尿汲取人の記憶である。この記憶は、「私」が次のように説明しているところから判断できるように、隠蔽記憶とよばれているものである。

この影像是何度となく復習され強められ集中され、そのたびごとに新たな意味を附されたものであることはまちがひがない。何故なら、漠とした周囲の情景のなかで、その「坂を下りて来るもの」の姿だけが不当な精密さを帯びてゐるからだ。

この記憶にあるように、特別な鮮明さと一見無意味なことが隠蔽記憶の特徴である。隠蔽記憶の中では、抑圧されているものが、別のものによつて置き換えられる。もっとも、この「私の半生を悩まし脅かしつづけたものの、最初の記念の影象」においては、それだけが呈示されているのではなく、ほぼこの影象の解釈の方向づけが「私」自身の分析によつて与えられているので、全く意味を持たないような印象は受けない。しかし、もし、この影象だけが描かれているのであれば、かなり唐突な印象を受けると思われる。

この影象への欲求を分析して、「私」は次のように述べている。

一つの重点は彼の紺の股引であり、一つの重点は彼の職業であった。（傍点）

この職業に対する欲求をさらに詳しく、彼の職業に対して、私は何か鋭い悲哀、身を擦るやうな悲哀への憧れのやう

なものを感じたのである。(略)彼の職業から、或る「身を挺してゐる」と謂つた感じ、或る投げやりな感じ、或る危険に対する親近の感じ、虚無と活力とのめざましい混合と謂つた感じ、さういふものが溢れ出て五歳の私に迫り私をとりこにした。

と記し、これを彼の職業の悲劇的な情緒と「私」は述べているが、「この情緒と同じ主題が、やがて、花電車の運転手や地下鉄の切符切りの上に移され」たと言ふ。これは、おそらく、右の影像にある男性性が祖母に禁圧されている点において、「私」の触れてはならない世界(花電車の運転手や地下鉄の切符切りの世界)と同一であり、その同一性のゆえに、「私の官能がそれを求めしかも私に拒まれてゐる或る場所、私に関係なしに行はれる生活や事件、その人々」にまで、その情緒が拡大されたためであらう。

もう一つの重点、「紺の股引」は男性そのものへの憧れを、股引によって蔽ひ隠したものである。つまり、あまりに露わな欲求を直接表現できずに、「彼の下半身を明瞭に輪廓づけ」る「紺の股引」によって置き換えて呈示しているのである。

二つの「重点」に分けられる理由は、「私」の分析に従うと、一つが、祖母の禁止と直接関わつた上での欲求であり、もう一つが、祖母の禁止とは間接的に関わつていない欲求だからだと言ふよう。「汚穢屋になりたい」と願つたことから分かるように、前者は、「私」が祖母の緊縛から自由になり、未知の男性的、行動的な存在たるうとした欲求を物語っている。他方、後者は、「紺の股引」に代置された男性性を手に入れることによつて、母を所有したいと願う欲求の現われである。この意味において、「私」は糞尿汲取人に対して二種の重点を見たのである。

しかし、右のように二分できるとは言つても、この影像の根幹をなしているのは、行動的な男性のイメージである。「第一の前提」と総称される糞尿汲取人や「オルレ안의少女と兵士の汗の匂ひ」は、いずれも行動的、攻撃的であり、その点、男性を象徴するものである。オルレ안의少女すなわちジャンヌ・ダルクが戦場へ向かう雄々しい「男」でなければならず、兵士たちが汗の匂ひという男性の力の象徴を発散させなければならなかつたのも、「私」がそこに男性的なものを見出そうとしたからである。

このエピソードの中で、「私の手を強く引いて道をよけ、立止つた女」は、祖

母であらう。

手をひいてくれてゐたのは、母か看護婦か女中かそれとも叔母か、それはわからない。(略)私はそのだれか知らぬ女の人に手を引かれ、坂を家の方へぼつて来た。むかうから下りて来る者があるので、女は私の手を強く引いて道をよけ、立止つた。

「だれか知らぬ女」に置き換えられた祖母が、「私」が男性的なものに近づくことを押し留めようとして、「私の手を強く引」いた、と言ふのである。祖母への愛情と、男性的なものに「私」が憧れるにもかかわらず、祖母がそれを禁じるという葛藤のために、祖母は「だれか知らぬ女」に置き換えられたと解釈されよう。

この系列の記憶に現われる影像に、「私」が「憧れと疾ましさと苛立たしい混淆を味は」つた、と言ふのは次のような意味があるからだろう。「私」が男として母を愛したいという欲求を一方では持っているのに対して、祖母は、母から「私」を奪つてそれを禁じ、また、「女の子」として育てようとした。そのような祖母に愛情を持っているにもかかわらず、「私」は祖母の禁止の縄目から逃れようとする。そこに葛藤が起こる。つまり、祖母への愛情と敵意の入り混じつた葛藤である。この場合、簡単に禁止から自由になれなかつたのは、先にも述べたように、祖母は圧倒的な強者であり、糞尿汲取人を見た時にも「私」が祖母を「見知らぬ女」に置き換えなければならなかつたほどの存在だつたからであり、このように、祖母を前提としたエディプス・コンプレックスを考へることに、第一の前提の様々な影像の持つ意味は明らかになるのである。

もう一つの「前提」は、天勝とクレオパトラに扮した記憶である。「第一の前提」が、エディプス・コンプレックスの状況を説明するものであれば、この「第二の前提」は、その葛藤から抜け出ようとした「私」の苦肉の策を明瞭にしている。つまり、この記憶では、「私」が自己を祖母と同一化することにより、その葛藤から逃れようとする試みが描かれているのである。

改めて言うまでもなく、天勝もクレオパトラも女であること、それも天勝は舞台の支配者であり、クレオパトラは現世の支配者であることが大きな特徴である。そして、彼女らが二人とも闇を通して浮かび上がる女性であることも忘れてはならないだろう。「私」の見も知らぬもの、「私」を騒かすものを、「私の床の周囲をとりまく闇の延長上に」浮かぶ「燦然たる都会」に思い描いたと書かれ、次いで、「やがて、私は『夜』が私のすぐ目近で帷をあげるのを見た。それは松

旭齋天勝の舞台だった」と、天勝のエピソードに移ってゆく。ここには、巧みに配置した闇のイメージの向こうに、天勝を出現させようとする意図が読み取れる。天勝は劇場の闇の中から浮かび上がり、同じように、クレオパトラは映画館の暗闇からスクリーンの上に出現する。この闇が「私」の変身を可能にするのである。この闇を通過して、家庭の支配者祖母は、舞台の華麗な支配者松旭齋天勝に、さらには古代エジプトの支配者クレオパトラに姿を変え、「私」は彼女たちに変身する。そうして「私」は祖母との同一化を果たすのである。この時、天勝やクレオパトラが女性であるがゆえに、祖母の禁止の縄目を解かれた「私」は、あの糞尿汲取人たちへの憧れと異なっていて、「疾ましさを覚えずにすむ」。

しかし、母の目に、天勝は祖母になった「私」は次のようなものを感じてしまふ。

ふとした加減で、私は母の顔を見た。母は母の顔を見た。母はこころもち背きだして、放心したやうに座つてゐた。そして私と目が合ふと、その目がすつと伏せられた。／＼私には了解した。涙が滲んで来た。／＼何をこのとき私は理解し、あるひは理解を迫られたのか？ 「罪に先立つ悔恨」といふ後年の主題が、ここでその端緒を暗示してみたのか？ それとも愛の目のなかに置かれたときにいかほど孤独がぶざまに見えるかといふ教訓を、私はそこから受けとり、同時にまた、私自身の愛の拒み方を、その裏側から学びとつたのか？

病床にある祖母と来客とに、「そこら中を駆けまはつた」「私」を気兼ねしてゐるといふのが、ここでは客観的に見た母の心理であろう。しかし、「私」が母の姿に感じ取つた内容は、そのようなものではなかった。ここでは、「罪に先立つ悔恨」といふ言葉が後年園子を見た時にも用いられ、園子との物語りが「私自身の愛の拒み方」の実践であることを考え合わせるべきであろう。また、無垢な少女園子と母のイメージが重ねられてゐることも注意する必要がある。つまり、正常な者、純潔な者から見られた「私」の言ひようのない悲哀が、ここでは描かれてゐるのである。天勝に扮した「私」はもはや祖母であり、祖母になることは、「私」が倒錯者になることである。そのとき、「私」は母の愛を受け容れる存在ではなくなり、母の手から愛児を奪い去つた祖母になつてゐるのである。そして母の住まう正常な世界から離れ去つてしまつた存在になるのである。その母への裏切り、そして同時に正常な世界からの離反、それらから受ける悲しみを、このとき「私」はおぼろげに知つた。ここでは、その正体を把握し切つてはいないが、園子に対した時、同じ悲哀は明瞭な姿を現わしはじめる。

一瞬毎に私へ近づいてくる園子を見てゐたとき、居たたまれない悲しみに私は襲はれた。かつてない感情だつた。私の存在の根柢が押しゆるがされるやうな悲しみである。(略) 悔恨だと私に意識された。しかし私に悔恨の資格を与へた罪があつたであらうか？ 明らかな矛盾ながら、罪に先立つ悔恨といふものがあるのではなからうか？

園子に抱く悲しみと、先の引用中の母に対して抱く悲しみとは同質のものとしてよい。ここでは、もちろん、己れの同性愛者たるものが、園子に対して罪となる予兆として描かれてゐる。これを見れば明らかなように、「私」が天勝に扮したことは、「私」の性的倒錯者たることのはっきりした予兆と言つてよい。

つまり、「第二の前提」となる記憶からは、「私」が自己を祖母と同一化することによつて、エディプス・コンプレックスの状況から逃れ出ようとした試みを、読み取ることができるのである。

最後の「前提」、「殺される若者たちを凡て愛した」ことは、どのように解釈できるのだろうか。フロイトは、サディズムとマゾヒズムの不可分性を説いて、その本源をマゾヒズムの方においてゐるが、その発現形態は多様である。「私」の場合には、「殺される若者たちを凡て愛した」と同時に、「自分が戦死したり殺されたりしてゐる状態を空想することに喜びを持つた」とあるように、第一章の時点では未分化なものである。

しかし、後には、聖セバスチャンや級友を殺す幻想を抱き、第四章で園子とダンス・ホールにいたときに見た半裸の若者を、次のような空想の中に投げ込む。鋭利な七首あひくもがああ腹巻をとほして彼の胴体に突き刺さることを。あの汚れた腹巻が血潮で美しく彩られることを。彼の血まみれの屍が戸板にのせられて

又ここへ運び込まれて来ることを。……

このように、後年に至ると、サディスティックな傾向を「私」は現わしてゐる。そして、このことは、倒錯者、殊に先天的な倒錯者にあつては、倒錯的衝動とサディスティックな衝動とが、分ちがたく錯綜してゐる場合が圧倒的であることを、推測させるのに好都合である。

と第二章で述べて、サディズムを性的倒錯の徴表と見なしてゐる。このように三島が考えたのは、サディズムの支配欲求と攻撃性に目を向けたからであらう。「私」は、エディプス・コンプレックスから逃れるために、自己を祖母と同一化した。その祖母は、天勝やクレオパトラのイメージと重なり合ふように、支配

者という印象を「私」に与える。他者を思いのままに支配しようとする欲求が性と結びついたとき、サディズムになるのである。祖母の支配欲求を受け継いだ「私」は、同性への愛を、サディズムの形で表現するのである。この傾向に、かなり神経質で、他者と暖かい交流を持ちえなかったであろう祖母の性格が大きく関与している。「私」の中に取り込んだ祖母像は、愛を表現するためには独善的な方法をしか知らなかった存在であった。その発現が「私」に対しては、自分の手許で、思いのままの枠組みの中に置くことであった。「私」は抵抗せず、祖母の意のままに動いたのである。このような祖母と「私」の関係を、同性愛の中にも「私」は持ち込んだと言うのが、「私」の場合におけるサディズムの意味である。

以上述べてきたように、三種類の「前提」は、フロイトのエディプス・コンプレックス理論を応用して解釈できるのである。むしろ、三島はフロイト理論を知悉していたと推測されるので、エディプス・コンプレックス理論によって、第一章における三種類の「前提」が書かれていると言った方が正確だろう。

そして、その際、三種類の「前提」は単に並列的な関係に置かれているのではなく、第一の「前提」から第三の「前提」までは、「私」の各々の段階を追って布置されているのである。再説すると、第一の「前提」は、祖母と母との間に挟まれた「私」の内的葛藤を示し、第二の「前提」は、そこから逃れるために、祖母と己れを同一視しようとした「私」の姿を描き、第三の「前提」では、祖母を内部に取り込んだ「私」の、同性に対する愛の形を明らかにしている、というように、「私」の変化のありさまが順序立てて叙述されているのである。

VI

自己分析に「科学的正確さ」を期した三島は、第一章における三種類の「前提」を、内容的には性的倒錯者「私」の人生の「前提」として、また作品構造的には第二章以降の「前提」として配置することを意図した。このような意図を持った三島は、エリスの著を通して知ったと推測されるヒルシュフェルトの説だけでなく、その名は挙げられていないが、フロイトのエディプス・コンプレックス理論を大幅に利用して、第一章を書いたのである。

性的倒錯という決定的な切札、そのカードさばきの冷静さは、見る者をして深く感嘆させる。己れの宿命に対して一言の弁明もなしに、事象を冷静に「告白」する態度は人の心を打つ。時々の記憶に忠実であろうとするかの如き姿勢は、人

々を感銘させもするだろう。しかし、それらがいずれも、フロイト理論の撰取や、相当手の込んだ構成意識の上に成立している点も見逃してはならない、と私は思うのである。

さて、本稿では、第一章に見られる三島の意図を追究してきたが、そこからさらに、三島全体またその時代の文脈に置いて、「仮面の告白」を眺めることも考えられる。というのも、この「仮面の告白」が、性的倒錯という特殊な題材を扱いつつも、三島の最も本質的な描き出ししていると思われるからであるが、この問題については別稿に譲ることにして、今はここで筆をおきたい。

注1、本多秋五『物語戦後文学史(全)』(新潮社・一九六六年三月)による。

注2、三島由紀夫「私の遍歴時代」(『東京新聞』・一九六三年一月一日)と五月二三日)。引用は『三島由紀夫全集』(新潮社・一九七三年四月)と一九七六年六月)によったが、一部漢字を改めたところがある。以下同様。

注3、坂本一亀「『仮面の告白』のころ」(『文芸』・一九七二年二月)に引用。

因みに、「仮面の告白」起稿は一九四八年一月二五日、脱稿は翌一九四九年四月二七日である。

注4、沢井深「三島由紀夫論」(『近代文学』・一九五四年一月、のち『日本文学研究資料叢書 三島由紀夫』・有精堂・一九七一年一月)に収む。

初出未見)、植村浩「三島由紀夫論——精神分析的な観点から——」(『解釈と鑑賞』・一九六二年四月)と五月)、等。

注5、国立国会図書館支部上野図書館編『邦文心理学文献目録稿』(一九五三年三月)等による。

注6、加藤正明他編『精神医学事典』(弘文堂・一九七五年二月)、エリスの項(安田一郎筆)。

注8、三島由紀夫「強引な仮説の魅力——S・フロイト著『芸術論』」(『日本読書新聞』・一九五三年一月一九日)。

注9、D・J・ウェスト、村上仁・高橋孝子訳『同性愛』(人文書院・一九七七年一月)。

注10、拙稿「『仮面の告白』論——『私』の存在基盤をめぐって——」(『国文学』八五号、発表予定)。